

山形市方言の条件表現形式「ドギ」

著者	櫻井 真美
雑誌名	言語科学論集
巻	6
ページ	73-83
発行年	2002-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30744

山形市方言の条件表現形式「ドギ」

櫻井 真美

キーワード：山形市方言、条件表現形式、「ドギ」、「時」、気付かない方言

要 旨

山形市の条件表現形式「ドギ」は共通語「時」と用法が大体同じであるものの他に、これから派生し、山形市方言独自に使われる仮説的用法がある。この用法は後件にモダリティーに関する制限を持つ。これらを話者は共通語使用時も「トキ」と清音にして使うため、一種の気付かない方言としての性格も有する。

1. はじめに

条件表現とは、複文において条件表現形式を挟んで前を前件（以下P）、後ろを後件（以下Q）とした場合、Qの成立においてPが何らかの条件となっていることを示す表現である。

共通語における条件表現形式といえば、「ば」「と」「たら」「なら」が代表的な形式である。勿論これら以外にも形式は存在し、〈条件づけを表す従属節を形成する形式〉として、仁田(1987)には「から」「ので」「ため」「ては」「限り」「以上」「場合」などが挙げられている。「時」は、その中の一つであると言える。また、この「時」は山形県山形市でも使用される。

では、山形市方言話者の共通語的会話の中で現れた「時」の例を挙げてみる。

(1) （筆者が電話で身体の不調を母に訴えたとき、母の応答）

疲れているトキ、もう寝なさい。

しかし、この用例は共通語としては不自然である。では、何故このような形式が山形市において使われているのか、それは上記(1)文例を、全て山形市方言に書き換えるとわかる。

(1)' ツカレットダギ、モウネロー。

山形市方言において、条件表現の一形式として「ドギ」が使用されているため、共通語で会話している際にも「トキ」と清音にすることでそのまま使用してしまうのである。これは、一種の気付かない方言であると言えるだろう。

では、山形市方言「ドギ（トキ）」は、どのような場面で現れる形式なのか、その用法を中心に記述していく。

2. 山形市の気付かない方言「トキ」

1. で気付かない方言として現れる「トキ」について触れたが、まずこれについて見ていきたいと思う。

上で見たように、山形市方言話者が共通語で会話しているという意識がある時に、実は共通語としては不自然な場面で「トキ」を使うことがある。1. で示した、(1)と共に、その他にも例を挙げる。

- (1) (筆者が電話で身体の不調を母に訴えたとき、母の応答)
疲れているトキ、もう寝なさい。
- (2) (スーパーで試食を勧める50代くらいの女性店員)
いいトキ、食べてみてくださいね。
- (3) (賞味期限が切れているものを食べようか迷っている人に対して)
駄目なトキ、やめなよー。

上記文例は共通語では不自然であり、(1)のPは「疲れているなら」、(2)のPは「よかったら（よければ）」、(3)のPは「駄目なら」というくらいのものである。

また、これを山形市方言に書き換えると、やはりそのまま、条件表現形式「ドギ」が出てくる。

- (1)' ツカレッタドギ、モウネロー。
- (2)' イイドギ、クテミテケラッシャイナー。
- (3)' ダメナドギ、ヤメロハー。

このように、山形市方言話者は、本来は方言である場合の条件表現形式「ドギ」を、共通語でも使用が可能だと思ってしまうことがあるようだ。山形市方言「ドギ」と共通語「時」の違いは単なる音の清濁だと思い、濁音を清音にすれば、共通語として通じると思ってしまうのであろう。このような現象は、特に中年層以上に多い。

よって、気付かない方言「トキ」の用法は、山形市方言「ドギ」に準ずると仮定できる。

3. 山形市方言話者による方言会話時の「ドギ」

前項では、共通語で会話しているという意識がある時に出てくる、気付かない方言「トキ」を見てきた。では、山形市方言「ドギ」は、普段の会話でどのように使われるのかを見ていく。

山形市方言では、動詞の終止形（「る」で終止する場合促音にして接続）、形容詞の終止形、形容動詞の連体形に「ドギ」を接続し、共通語の条件表現形式「たら」「なら」のように使用する場面が見られる。

3. 1. 「ドギ」が担う条件表現の種類

まず、「ドギ」が条件表現の中でもどの位置に当てはまり、どの用法で使われているのかを確認しておく必要があるだろう。

条件表現は一般的に、「順接仮定条件」、「順接事実（確定）条件」、「逆接仮定条件」、「逆接事実（確定）条件」の四つに分類される。前出の用例(1)(2)(3)から、Pは出来事を仮定的に予想し、これに対してQが予想される結果として実現することを表すため¹⁾、山形市方言「ドギ」はこの内の「順接仮定条件」であると言える。この順接仮定条件にも更に諸々の用法がある。以下に、三井(2002)の分類とその説明を引用しつつ、作例して「ドギ」について確認する。

また、山形市方言への書き換えは筆者内省²⁾であり、使用の判定についてはより正確なものとするため、内省の後、50代男性話者、50代女性話者³⁾が行った。
○仮説的用法…未実現の事態について、実現した場合を仮定する用法。

(4) 頑張って書けば、締め切りに間に合う。

(4)'*ガンバテ カグドギ、シメキリサ マニアウ。

(4)で山形市方言「ドギ」は使用できない。しかし、前出の(1)'用例に倣い、例えばQを述べたてではなく、命令にした例文では、使用できる。

(5) 手紙を書くなら、丁寧に書きなさい。

(5)' テガミ カグドギ、テイネイニ カゲ。

○反事実的用法…現実には実現しなかった事態を、仮に実現したと仮定しする用法。

(6) もっと早く来れば、よかったのに。

(6)'*モット ハヤグ クッドギ、イガッタノニ。

○一般用法…前件の下では後件がいつでも時間を超えて成り立つことを述べる用法。

(7) 急いで書けば、誰だって汚い字になる。

(7)'*イソイデ カグドギ、ダレダテ キタネージニナル。

○反復習慣用法…前件に伴って後件が実現する、ということが繰り返し起こりうることを述べる用法。

(8) 花子が書くと、いつも資料が読みやすい。

(8)'*ハナコガ カグドギ、イツモ シリョウ ヨミヤスイ。

○事実的用法…すでに実現した一回限りの事態について述べる用法。

(9) 昨日買い物に行ったら、友達に会った。

(9)' キンナ カイモノサ イッタドギ、トモダチサ アッタ。

これは、共通語「時」でも言い換えがきくものであり、「時」の語彙的な意味が残っているものである。よって、条件づけを表すものには違いないが、狭義で条件表現「形式」とは言い難いものである。

○前置き…前件と後件が同じ次元の事態で構成されない用法。

(10) 今思えば、昔は暇だったなあ。

(10)'*イマオモウドギ、ムガスワ ヒマダッケナー。

また、注意しなければならないものとして、

(11) ネムイドギ、ネロハ。 〈Q＝提案〉

(眠いなら 寝てしまえよ。)

という文例は、〔一般用法〕としても解釈できそうに見える。〔一般用法〕とは、PのもとではQがいつでも時間を超えて成り立つということを示すものであり、不特定の主体による一般的な事態である。(11)の場合、P「眠いなら」のもとでは、Q「寝てしまえよ」ということ（と発話者が勧めたくなる状況）が一般的に成り立つというものである。

しかし、山形市方言の「ドギ」を使用するときは、PのもとでQが成り立つのは発話した一回のみとなる。〈今、あなたが〉P「眠いなら」、Q「寝てしまえよ」という、〔仮説的用法〕なのである。他に例えば、典型的な〔一般用法〕の文例として、

(12) 2に3を足せば、5になる。

というような文例を、山形市方言「ドギ」を使用して、

(12)'*2サ 3 タスドギ、5ニナル。

と書き換えることは不可能である。

以上より、山形市方言「ドギ」は、三井(2002)の分類のうち、[仮説的用法]、[事実的用法]の二つの用法において使われるという仮説が立てられる。

さて、この二用法で、後件Qの制限について見ていく。

3. 2. 「ドギ」使用時の後件の制限

三井(2002)に挙げられた調査文を使用し¹⁴⁾、条件表現形式「ドギ」を使用する場合の後件Qの制限について確認をしていく。

3. 2. 1 仮説的用法の場合

条件表現に関しては、後件のモダリティーに関する制限がしばしば問題になる。よって、2. に挙げた例文を確認すると、Qは以下のようになっている。

(1)' ツカレットドギ、モウネロー。 〈Q=命令〉

(疲れているなら、もう寝ろ。)

(2)' イイドギ、クテミテケラッシュイナ。 〈Q=依頼〉

(よかったら、食べてみてくださいね。)

(3)' ダメナドギ、ヤメロハー。 〈Q=提案〉

(だめなら、やめてしまいなさいよ。)

以上の用例では全て、Qが、人に何らかの働きかけをしているものとなっている。

では、上記以外で他にどのような用例があるか、内省と談話資料¹⁵⁾より提示したいと思う。

(13) デガゲネガ。シグドギ、イッショニ アペー。 〈Q=勧誘〉

(出掛けないか。行くなら、一緒に 行こう。)

(14) ツカウドギ、ケル。 〈Q=申し出(授与)〉

(使うなら、あげる。)

(15) ホイツデ マニアウドギ、ツカッテ。 〈Q=テ形依頼〉

(それで 間に合うなら、使って。)

(16) イソガシイドギ、ムリシネクテ イイヨ。 〈Q=容認〉

(忙しいなら、無理しなくて いいよ。)

(17) モシ ワガンネドギ、マダ キイデイイガー。 〈Q=許可申請〉

(もし わからなかったら、また 聞いていいか。)

既に内省と談話資料からの用例で、「ドギ」はQが命令、依頼、提案、勧誘、申し出、容認、許可申請の際に使用できることがわかったので、この他のQが使

われている調査文について三井(2002)を手がかりに確認する。上段共通語のものが三井(2002)による調査文、下段が山形市方言「ドギ」を使用して、筆者が書き換えたものである。

(18) 高校を卒業したら、大学に行きたいな。 〈Q＝希望〉

(18)'*コーコーバ ソツギョーシタドギ、ダイガグサ ングデーナー。

(19) [独り言で]

そうだ、夏休みになったら、旅行に行こう。 〈Q＝意志〉

(19)'*ンダ、ナツヤスミ ナッタドギ、リョコウサ ンッカ。

以上が三井(2002)で後件のモダリティー制限に着目した場合の調査文と、山形市方言「ドギ」を使用して書き換えた文となる。しかし、以上ではいずれも「ドギ」の使用は不可となった。

それ以外で三井(2002)に挙げられた調査文から、別のモダリティーを表す調査文も書き換えてみる。

(20) 魚を買うなら、朝市がいい。 〈Q＝評価〉

(20)'*サガナバ カウドギ、アサイヂガ イー。

(21) あした雪が降ると、困るなあ。 〈Q＝懸念〉

(21)'*アシタ ユギ フッドギ、コマルナー。

(22) そんな暗いところで本を読んだら、目を悪くするよ。 〈Q＝警告〉

(22)'*ホダナ クライドゴデ ホン ヨンダドギ、メー ワルグスツゾ。

(23) そっちへ行っては、いけません。 〈Q＝禁止〉

(23)'*ホッチャ イッタドギ、ワガラネ。

以上も「ドギ」を使用することが出来ない。また、3. 1で、最もスタンダードな述べたての文でも、「ドギ」を使用することが不可能であった。

(4) 頑張って書けば、締め切りに間に合う。 〈Q＝断定〉

(4)'*ガンバテ カグドギ、シメキリサ マニアウ。

これに関連し、Qを述べたての中でも推量の文を作例し、判定する。

(24) 明日台風が来たら、電車は止まるだろう。 〈Q＝推量〉

(24)'*アシタ タイフーキタドギ、デンシャワ トマッベナー。

推量での使用も出来ない。

よって、山形市方言「ドギ」の仮説的用法においては、後件に次のようなモダリティー上の制限があることがわかる。

①が命令、依頼、提案、勧誘、申し出、容認、許可申請など「働きかけ」の

場合→ 使用可

Qが断定、推量など「述べたて」の場合、及び、希望、意志、評価、懸念、警告、禁止など「表出」の場合→ 使用不可

3. 2. 2 事実的用法の場合

続いて事実的用法について見ていく。この用法は、談話資料の用例中に出ていない。調査文は引き続き、三井(2002)を使用する。

(20) そこへ行ったらもう会は終わっていた。

(20)' ソゴサ イッタドギ、モウ カイワ オワッテダッケ。

(21) 昨日、散歩していたら急に雨が降ってきた。

(21)' キンナ、サンボシッタドギ イギナリ アメ フッテキタッケ。

(22) 手紙を出したらすぐ返事がきた。

(22)' テガミ ダシタドギ スグ ヘンジ キタ。

(23) あわてて来たら忘れ物をしてしまった。

(23)' アワテデ キタドギ ワスレモノ シテスマタ。

このように、事実的用法ではQが全て、述べたて（断定）にしかならざるを得ないため、仮説的用法のような後件の制限はない。

4. 共通語「時」との関連で見た「ドギ」

山形市方言の「ドギ」の使用が可能な文例において、「ドギ」をそのまま清音にするか、または助詞を後接することで、共通語でも使用が可能と思われるものがある。これについて確認したい。

4. 1 仮説的用法

まず仮説的用法において、(15)(16)(17)の用例は、「ドギ」を清音にし、助詞を後接させると、共通語でも使用が可能と思われる。

(15) ホイゾデ マニアウドギ、ツカッテ。

(それで 間に合うなら、使って。)

→ 間に合う時は、

(16) イソガシイドギ、ムリシネクテ イイヨ。

(忙しいなら、無理しなくて いいよ。)

→ 忙しい時には、

(17) モシ ワガンネドギ、マダ キイデイイガー。

(もし わからなかったら、また 聞いていいか。)

→ わからない時には、

これらの文例は山形市では2で述べた気付かない方言として使われるものであり、助詞がなくとも不自然とはならない。元々山形市はいわゆる無助詞地域と言われる地方に属し、共通語で助詞を承接しないと不自然となる場合でも助詞を使用しないことが多い。このことから、(15)(16)(17)の文例は、共通語「時」と同じもので、「時は」「時には」と言うべきところで助詞を使用しないものだと考えられる。

まとめると、仮説的用法において山形市方言には、共通語で言い換えがきく「ドギ」と、言い換えがきかない「ドギ」がある。前者は、この節で取り上げたもので、山形市が無助詞地域だということに由来すると思われる。また、後者はそこから派生して山形市方言独自のものとして発達したものだという仮説が立てられるのではないだろうか。

4. 2 事実的用法

また、事実的用法の場合共通語で、

(9)' キンナ カイモノサ イッタドギ、トモダチサ アッタ。

→ (昨日 買い物に) 行った時、 (友達に 会った。)

(20) そこへ行ったら、もう会は終わっていた。

→ 行った時には、

(21) 昨日、散歩していたら、急に雨が降ってきた。^{#6}

→ していた時に、

というように言うことができる。(22)(23)も同様に、「時には」などで言い換えることができる。よって、「ドギ」が事実的用法において使用される場合は、共通語と同じように「時」という語彙的概念を持つものと考えられる。この場合も仮説的用法と同じく、気付かない方言として使われるものであり、助詞がなくとも不自然とはならない。しかし、(9)'のように共通語でも助詞を必要としないものもあるため、事実的用法において助詞がなくとも使えるということが、特に山形市方言だけに見られることではないように思われる。

以上に挙げた事実的用法における「ドギ」は条件表現形式の一つというより、名詞「時」の濁音化したものであり、助詞の承接については共通語より強制力が

ないもの、という仮説が立てられる。助詞が落ちても不自然にならないということに関しては、4. 1の仮説的用法の場合と同じ理由である。

5. まとめ

山形市方言の順接条件形式「ドギ」についてまとめると、以下のようになる。

I. 「ドギ」は、順接仮定条件の〔仮説的用法〕、〔事實的用法〕で使われる山形市方言条件表現形式の一つである。「ドギ」は、動詞の終止形（「る」で終止する場合促音にして接続）、過去形、形容詞の終止形、形容動詞の連体形に接続し、共通語の条件表現形式「たら」「なら」のように使用される。

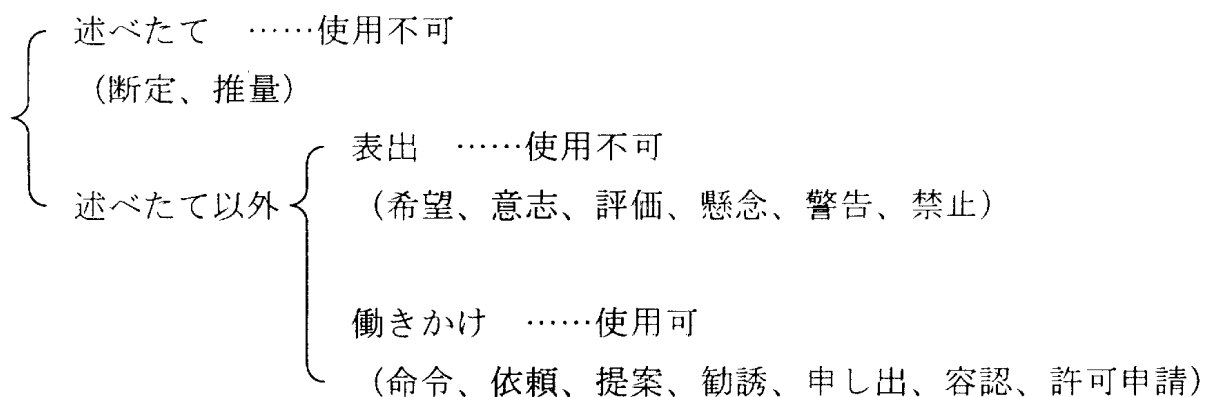
I-i. 〔仮説的用法〕において、山形市方言には、共通語で言い換えがきく「ドギ」と、言い換えがきかない「ドギ」がある。前者は、共通語「時は」「時には」と対応するが、助詞を付けずに「ドギ」単独で用いるのは山形市が無助詞地域だということに由来すると思われる。また、後者はそこから派生して山形市方言独自のものとして発達したものだという仮説が立てられる。

I-ii. 〔事實的用法〕においては、「時」という語彙的概念を持ち、条件表現形式の一つというより、共通語「時」同様、名詞句に用いられ、助詞の承接については共通語より強制力がないもの、と考えられる。

II. 後件の制限

〔仮説的用法〕

後件Q =



〔事實的用法〕

後件Q = 述べたて（断定）となるため、後件の制限はない。

Ⅲ. 共通語で会話しているときでも、濁音「ドギ」を清音「トキ」にし、共通語「時」のつもりで使用する場面が見られ、いわゆる気付かない方言として存在していると言える。この場合の用法は、方言会話時の「ドギ」に準ずる。

6. おわりに

今回は内省、50 代話者男女一名ずつで文例の判定を行ったが、50 代話者の方が「ドギ」の使用できる範囲が、筆者の内省より広いという印象を受けた。このため、特に年代差に着目して調査を行い、今現在山形市方言の「ドギ」がどのように使用されているかを記述する必要があると思われる。

今回は山形県山形市に絞ったが、地域差があることを仮定し、山形市が属する山形県村山地方の他地域で、同じような調査を行うことも検討している。

注

- 1) 一般的な書き方をしたが、厳密には「ドギ」使用時にはQに「働きかけ」がくるという制限があるため、Pの仮定に対し、Qは予想される結果が実現するよう（人に働きかける）ということになるだろう。このことは後で述べる。
- 2) 筆者（1976 生）は、山形市生え抜き（但し 0 歳～2 歳まで東京都八王子市在住、24 歳～現在は宮城県仙台市在住）。
- 3) 筆者の父（1945 生）山形市生え抜き（但し、18～19 歳の時愛知県豊田市、19～33 歳まで東京都田無市、国立市、国分寺市、西多摩郡五日町市〔現 あきる野市〕、八王子市在住）、筆者の母（1951 生）山形市生え抜き（但し 24 歳～26 歳まで東京都八王子市在住）である。
- 4) 調査文の通し番号は筆者により書き換えられている。また、三井の調査文には、『方言文法全国地図』の調査票や、日高水穂(1999)「ことばに関するアンケート調査 1997-1998」『秋田大学言葉の調査』第一集の調査文を出典としたものも一部含まれている。
- 5) 談話資料の話者は、注3にある筆者の母と、筆者の妹（1978 生）山形市生え抜き（但し 0 歳の時東京都八王子市在住）である。
- 6) (21)の場合、「に」という助詞が連続してしまうので、「急に」を「突然」などに換えると不自然さが消えると思われる。

参考文献

飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一/編 1982 『講座方言学 4 - 北海道・東北地方の方言』

国書刊行会

仁田 義雄 1987 「条件づけとその周辺」 『日本語学』6-9 明治書院

蓮沼昭子、有田節子、前田直子 2001 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』 くろしお出版

日高 水穂 2000 「秋田方言の文法」 秋田県教育委員会/編『秋田のことば』 無明舎出版

益岡 隆志/編 1993 『日本語の条件表現』 くろしお出版

三井 はるみ 1998 「11. 条件表現」 加藤正信・遠藤仁/編『宮城県中新田町方言の研究』(科研費報告書)

————— 2002 「条件表現」 大西拓一郎/編『方言文法調査ガイドブック』(科研費報告書)

— 東北大学大学院生 —